

わたしの原風景

10 三浦太郎

みうらたらう／絵本作家



僕は愛知県西尾市にある文海堂書店の跡取り息子として生まれました。親父は四代目ですから、そこそこ古い本屋です。いわゆる商店街の本屋さんで、家の入り口が本屋の入り口でした。

赤ん坊の頃から、本屋は僕にとって格好の遊び場で、そこで育ったと言っても過言ではありません。周りから「大きくなったら本屋さんやるんだね」と大事にされていましたし、当時はまだ本屋が街の社交場の役割をしていた時代でしたから、お店にいるとろんな人がやってきて、必ず言うのが「おしめを変えてあげたのよ」。僕ほどたくさんの人におしめを変えてもらった子はいないのではないかと思うくらい、こつ話すおばさまが次々現れるのです。小さな街ですから文海堂の太郎ちゃんと言えば、それくらい知らない人はいませんでした。

小学生になれば店の手伝いもよくやらされました。付録のある「なかよし」や「りぼん」を「ニール紐」でしばったり、紙袋にゴム印を押ししたり。店の前に止まるトラックからの荷下ろしもしました。あの頃は山のように「週刊少年ジャンプ」が積まれていて、毎週楽しみをしていたのです。今でも古雑誌を出すときに役に立っているのが返品品の荷造りで、段ボール箱に紐を十字または井の字に掛けるのですが、切らずに一本の紐で掛けるのがなかなか難しいのです。子どもの力ではすぐゆるんでしまい、父に教わりながら何度も練習しました。そして、毎晩九時半の閉店時には配達用の自転車を店内に入れ、シャッターを下ろす。これはテレビを覗いていても中断して必ずやっていました。

現在、西尾に帰っても僕の育った本屋と商店街は二十年前の道の幅で影も形もありません。本屋は少し離れた場所に移転し、妹が教科書販売を中心とした小さな店を続けています。その店には三浦太郎の絵本コーナーがあり両親が僕の本を売ってくれています。あの本に囲まれた幼少時代、まさか自分が本を作る側になるなんて、まったく想像もしていませんでした。どうやら僕と本は切っても切れない関係なのかもしれません。